

シシくこころ静かに遊べ我が連れく

作 黒川陽子、矢戸優太郎

◇登場人物

- ・嘉兵衛 かへえ 漁師 芸の神様に選ばれた男
- ・茂太郎 しげたろう 漁師
- ・あや 茂太郎の妻
- ・いと 茂太郎とあやの娘 口減らしのために女衞に売られそうになっている
- ・網元 あみもと 村の長。他の村人と同じく「漁民」だが、資産家であり、漁の道具の貸し出し、魚介類を商人に販売し地頭に納める、年貢のとりまとめを行ったりする。
- ・彦一 ひこいち 狩人。いとの想い人。孤独に生きるが山の恵みを皆に分けている。
- ・ホカイビト 旅芸人。幻世と現世を行ったり来たりする人
- ・仁さん にんじん 笛・尺八、漁民。
- ・女衞 むすめ 仙台からいとを買いに来る ラッパー
- ・はな 網元の娘
- ・牡鹿 おじか
- ・雌鹿 めじか
- ・ギター

キャラクターのデイフィカリティ(できないこと)

- 〈嘉兵衛〉・見えない(盲または弱視) ・常識がない ・否定しない
- 〈茂太郎〉・前向きになれない ・人を信じられない
- 〈網元〉・決められない ・強く押せない
- 〈いと〉・自分を大切にできない ・世の中を知らない
- 〈あや〉・不正を許さない ・ギャンブルをしない
- 〈女衞〉・目に見えるものしか信じない ・人を信じない ・洋服のセンスがない
- 〈ホカイビト〉・人体エネルギーが5%程しかない ・誰でもない
- 〈ジンさん〉・ものづくりには興味がない ・喋らない。
- 〈彦一〉・人付き合いができない ・家族がいらない。

*台詞の太字は、歌やリズムになります。

*牡鹿、雌鹿は、ホカイビトの化身の様なものであり、この物語において芸能の源泉を意味する

◆第一場 浜の営み

ブルースギターが聞こえてくる。舞台上には浜小屋らしき掘立小屋、ガレキなどが散らばっている。

すでに朽ちているものもあれば、流れ着いたばかりのように見えるものもある。ガレキの中にボロをまとった茂太郎家族と仁さんが瓦礫作業をしている。

奥にホカイビトが、森の化身のようないでたちでセットの中に溶け込んでいる。

女性の笑い声とストンプ(手拍子等)、最初はランダムに聞こえるがリズムになっていく

茂太郎

(リズム消え笑い声が残り) あんなどこまで舟が流れ着いたんだなあ。

まだ、木にひっかかっておちてこね。みんなで、そろそろおろしてみつかか。

いと (無視して) あー、この四、五日、まともにくってねえ。ひもじいな。

あや いと、あんた、ずいぶんやせたんでねーかー。

いと (嬉しそうに) ほんとか？ でも、このままだと死ぬ。

あや だから。考えてもしようがねえよ。何かして気を紛らねば。

いと なんだ。食いもんのことばっかり考えてしまうから。

あや 浜のかたづけすべし。もう、なにもねえかな、(何か裏返し) いいもの。

いと あ、このタライ、まだ使えるべか。

あや 腐ってなけりや。

いと (タライを確認して) ダメだ、底さ穴が空いた。

あや 一年も野ざらしになってたんだ。自分がタライだってことも忘れてるよ。

いと なんだ。でも、嘉兵衛にみせたら「もったいねえ太鼓にすつべ」っていうがら。

茂太郎 あいつはいつも太鼓たたくことと踊ることだけだ。ほんとばかなやつだ。

あや シヤケ様の皮なめしてはるんだべな。あいつじゃねえとすぐにやぶれるけどな。

ほんと、嘉兵衛は紙一重のきちげえだ。

いと 嘉兵衛が叩いて踊ると、腹がよじれるほど、楽しいさね。あ、思い出しちゃった。

(嘉兵衛の太鼓たたきの真似をするいと。茂太郎以外、笑)

【ホカイビト】

仁さんの笛。セットに溶け込んでいたホカイビトが前へ。お辞儀し、朗らかに謡い始める。

ホカイ (M やちたび) やちたびの はまよるなみ よりまして かえずがえすは たいこのしらべ……

数え切れないほど繰り返しこの浜辺に寄せてきた波、それよりなお多く、この浜から海へと返されたのは力強い太鼓の調べ。こんばんは。相も変わらず変わり続ける(自然の脅威に晒される)この世にあつて、ほんの一時、皆さまとお会いできたこと、望外の幸せでございます。(さらに照明、BG 変わる)

さて、いま皆様がいるここ三陸の地には「シシオドリ」なる芸能がございます、こちらも時の流れに浮き沈みしながら、息を続けてまいりました。死者を弔い、子孫繁栄を願う芸能……それだけなら変わったことございません。しかしシシオドリにおいては、(美術・映像投影)なぜか鹿の仮面をかぶり、背中から天を貫かんばかりのササラを生やし、派手な幕を五体にはためかせて歌い踊るのでございます。この奇妙な芸能の由来は様々に語られていますが、真実は、すでに忘却の闇に流れ去ってしまいました。

ホカイビトの背後に、原始的で陽気な村人たちが作業を始める。太鼓を刻みながら嘉兵衛、サバイバルの歌を歌い登場、茂太郎、あや、いと、を中心に全員楽しげ。ガレキの片付けをする彼らに、ホカイビトの姿は見えていない。あや、太鼓で加わる。

いと (嘉兵衛に向かって) 嘉兵衛だ！

嘉兵衛 サバイバルの歌…みみず、ナメクジ、フナムシ、ケムシ (2回目からみんなで歌う)

嘉兵衛 (足で触察)お、ミミズだべ。(あーんと食べる)うめえ。おめに半分やる。

茂太郎 ミミズはいいよ。湯通ししねえとどろくせえから、おら、フナムシだ。

ほれ、とるのうめんだ。あーん、、うめぐね。おめにも一匹やる。

いと やだつ、おら無理。

あや んだども、あんどきはみんな太ったな。

いと ああ、肥えたな。津波が引いたら、しゃけ様が数え切れないほど打ち上げられたからな。

毎日食べ続けて、しまいにや、体にしゃけの模様がうき出て来るかと思った。

あや んなわけねえべ。(いと・あや笑う)

茂太郎 いま考えつと、ほんと、ありがてえことだ。この秋は不思議とこねえな、シヤケ様。

(音楽、あやの太鼓終わる)

ほんと、一匹でいいんだ、、くいてえな、思いつきり、くいてえよー。(嘉兵衛以外、同意)

ホカイ ここは、江戸時代はじめの仙台藩。三陸の山と海に囲まれた小さな漁村でございます。

昨年の冬、山のような大波がこの地を洗い、村人の半分をあの世に連れ去りました。世に言う、

「慶長の天津波」でございます。ここからはるか南西では、「仙台公」と呼ばれる伊達政宗が、大

胆な復興政策をつぎつぎに打ち出しております。(SE 波音)

波音が聞こえてまいりました。さあ、これより物語の始まりです。忘れ去られた真実を、ご一緒に

探しに行きましょう。語りをつとめますわたくしは……(M 海のとなかイントロ、他の出演者も

顔見せ、作業に加わる。唱歌・ピアノシンモで) 口唱歌…ツル…アアオン ツル…アアウペ

ツペポン

嘉兵衛 これ、なんだべ?(触察 美術・石碑のかけらを見つけ、茂家族、顔を寄せ合い見る。かけらに照

明)

ホカイ (名乗ろうとしてやめ) いえ、それは、彼が会いに来たときに明かすとしましょう。

ホカイビトの視線の先には嘉兵衛がいる。ホカイビト風景に戻る。

作業をしていた全員がステージ面に一列になり口唱歌と演奏強フォルテッシモへ。

M 海のとなか (リズムと打楽器が始まる)

全員 波がどつぷり 寄せて砕けりや

舟の舵取り ままならなくて

ゆきつもどりつ 嘆いてみても

思い通りにゃ なりはせぬ

波をあなどり 漕ぎ出すやつは

あ もんどりうって 果てる定めさ

全員 さびつなびつなびー、ほいやさー

んーぽぽちかぶ んーぽぽちかぶ x2

彦・茂 せつに願うは 暮らしのゆとり

嘉・あ 浜のいろどり (+あ)大漁おどりさ

全員 カキもホタテも よりどりみどり

漁り(すなどり) 稼業で 天下取り

いと

わたしやうつとり おしどり気取り

あととり助けて 手取り足取り

だども近づく 涙の日取り

ひとり山越え 都鳥(みやこどり)

男性

さらつさらつさらー、ほいやさらー

んーぼぼしかぶ んーぼぼしかぶ x4

女性

波がどつぷり 寄せて砕けりや

舟の舵取り ままならなくて

嘉兵衛がガレキの中から石板を拾い上げる。

嘉兵衛

石だつーのは分かつてんだけどや。

茂太郎

舟の破片は、こっちさ集めてくろ。

嘉兵衛

(触察) 妙な模様が彫ってある。

あやといとが、嘉兵衛に近づく。

あや

たしかに変わった石だね。

茂太郎

(その場で) そんな調子じゃいつまでたつてもおわんね。

いと

どこかで見たなあ。これは文字じゃねーか。

嘉兵衛

何て書いてあるんだ？

いと

おらに分かるのは、これが文字だつてことだけだ。

あや

読めるわけねえべ。

茂太郎

おめえらが魚だったら、漁も楽だべな。

嘉兵衛

え？

茂太郎

目の前のものに、すーぐ食いつくべ。

茂太郎

(あやのウクレレ、嘉兵衛は茂太郎に飛びつき二人は子供のようになじやれ合う)

茂太郎

やめろつて、やめろつて。ちよするなつ、このー

◆網元

網元(あみもと) が現れる。他の村人よりも少し綺麗な着物をきている。

網元

ガキか、、、(集められた瓦礫をみて) しかも、今頃になって津波の後始末か。

嘉兵衛

あ、網元。

網元

嘉兵衛、話がある。

嘉兵衛

おう。

茂太郎

ああ、網元様!

茂太郎が網元にすがりつく。

網元

(驚いて) なんだ! 腹を空かせた魚みてえに。

茂太郎

(茂太郎、あやのウクレレ・マイナーのバラード調の歌で)

茂太郎

おねげえします。百文ばかり、お貸しくだせえ。

網元 (客に)百文！現代でいう三千円です。(茂太郎に)おめえ、先月も貸したべ。

茂太郎 時化つづきで漁さ出られず、このままでは年越せねえ。

網元 無理だな。去年の津波で、おらも痛い目を見たんだ。

茂太郎 だども、津波の後にはたいそう魚がとれたし……なのに、網元様がくださった金は雀の涙ほどで。

網元 (おらが貯めこんでいると?)

あや (突然、網元に食らいつき) 貯めこんでねーとでも言うんか!

網元 あ?

あや おらたちの金をどこにやった。あれだけあれば、一年は暮らせるはずだ。

嘉兵衛 (なだめて) まあ、まあ。

網元 あん時はどこの浜にも魚が打ち上げられたんだ。それで、商人連中が買ったいた。大漁だつて

喜

んでたのは、おめでたい漁師だけだ。

あや そこをきっちり売るのがおめえの役目だべ!

嘉兵衛 (割って入り、陽気な調子な歌で) おらに借金するのはどうだ?

茂太郎 なんておめえに?

嘉兵衛

(ハワイ調)ほら、浜も綺麗になった。また思いきり漁ができる。そこでおらが受け取る手取り、あらかじめ網元にもらつて、おめえ(茂太郎に)にたんまり貸してやるよ。余裕ができれば返してくれりゃいいから。

網元 それは、おらに借金するってことだべ。

嘉兵衛 ダメか。

いと

(茂太郎とあやに、悲しげなバラードに) 父ちゃん母ちゃん、もういいよ。もういいんだ。(思いつめた顔で) おら、腹を括ったから。

嘉兵衛 なんておめえが?

あや いと……(悲しいウクレレ)

茂太郎 (あやに) もう行くべ。

あや (捨て台詞を残し) あんな高い所さ家建てて。痛い目なんか見るもんかね。(雷!)

いと (嘉兵衛に、つとめて明るく) 今夜は一周忌だ。忘れずにお寺さ来いよ。

嘉兵衛 おう。

茂太郎、あや、いとは去っていく。

網元、あやの方をチラと見る。

嘉兵衛 助けてやれんのか、網元お!

網元 返すあてもないのに毎日毎日同じことを。ちとらとつくの昔にすつからかんだ。

津波でいちばん舟を流されたのはおらだぞ。先祖代々の蓄えが……

嘉兵衛 おうおう、泣くな。

網元 まあ、あいつらの気持ちもわかる。食い扶持に困るからって、娘を手放すのは辛いことだ。

嘉兵衛 なんの話だ?

網元 (話をそらして) おめえ、米は好きだったよな。(ブルース・ギター)

嘉兵衛 米? ごはんのことか? 塩をかけてギューと(握る)。いままで食った物の仲じゃ一番うめえ

な。

網元 そうなのか。

嘉兵衛 あれなら腹が裂けるほど食えるぞ、あれ、匂いがしねえ。どこにあるんだ?

網元 ねえよ。今朝、お触れがあった。山を拓いて田んぼを作れと。

嘉兵衛 田んぼ?(一瞬の間) んなら、田んぼの踊り作んなきゃな。たあくんぼくのうたう

網元 いいがら(制止し)。田んぼで米作れってことだ。おめえの好きな米をな。

嘉兵衛 米かあ。

網元 そうだ。藩の石高を上げるらしい。

嘉兵衛 石高が上がる。おう、そりゃあ結構なことだ。

網元 おめえ、わかって言ってるのか？ま、すぐに作業さ入れるよう、漁師たちをまとめてくれ。

嘉兵衛 いいど、任しときな。

網元 ……おい。本当にわかって言ってるのか？こいつは、とてつもなく大変な事業なんだぞ。

嘉兵衛 なに？ おめえがやれつつたから俺が「任せろ」って言ったんだ。

何かおかしいことがあるか？

網元 だども、無理だべ。あの山を削るのにどんだけの人手と時間が必要なんだ。どう考えても無理だろ。

嘉兵衛 おう、泣くな。やれつつたのはおめえでねえか。

じゃ、米なんて手エ出さなきゃいいじゃねえのか、無理すんな。

網元 だったら言うが、(M 網元)浜が元に戻ったとして、どんだけの漁師が海に出られる？男の数は？

舟の数は？足りねえんだよ。全然、たりねえ。ぜんぶ流されちゃった。おらだって今まで海で生きてきたんだ。だがお上の言うことにやあ逆らえねえ。おめえら、金をせびれば何とかなると思ってるねえか。だが、おらに何がある？あの屋敷か。中身は空だ！空っぽだ！ 中身は空だ！空っぽだ！

嘉兵衛 きれにな着物着てるんだ**か**！それでいいじゃねえか。

網元 ほでなすっこの。一張羅だ！

嘉兵衛 そうかそうか。

網元 ……なあ、嘉兵衛よ。おらたちが生きる道は一つしかねえ。お上(かみ)に、助けってもらうことだ。

嘉兵衛 お上に従えば助けてくれると？

網元 そうだ、仙台公は偉大なお方だ。

嘉兵衛 ふーん、良いねえ。偉大な方、会ってみてえ。俺も力になってやるよ。

網元 そうだな。おめえとなら、一緒に夢を見れっかなって。

網元、嘉兵衛の両肩をがっしりと掴み、深く頷くと、立ち去る。笛の音(やちたび)。

嘉兵衛 夢……？夢ってなんだべなあ。おらの頭の中さ、ずーっと流れてる、この音のことだべか。

嘉兵衛はふと手にした石板のかけらを触察。すこし、石板で遊び、網元とは反対の方向に去っていく。

◆第二場 朽ちた寺

ホカイビト (Mやちたび)天霧(ぎ)らし 降る白雪 染まる野辺 晴れ舞台とぞ シシの道行き
人は寝(い)を 寝みし知らぬ夜(よ) 明くるまで

さて、夜がやつてまいりました。人々は焼けるような空腹をなだめながら、それぞれの夢の世界へと降りてゆきます。山や海の恵みを腹いっぱい食べる夢、白くて甘い米を口いっぱい頬張る夢……そう、この時代、三陸で米を作るなんて、夜の夢よりもなお儂い幻でございました。当時の稲は寒さに弱く、この地の厳しい気候には耐えられなかったのでございます。皆さんは「ヤマセ」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。夏場、この地を凍らせるような冷たい風が……(空から雪が舞い降りてきているのに気づく)ああ、それでも夏が懐かしい。今夜も痺れる寒さになりそうです。こんな夜は身体を縮めてやり過ごすに限る。(笛終わり)では、私も失礼して(近くの物陰で身体を丸め、眠ろうとする)

(墓おどりイントロ 嘉、茂の念仏 んーだっあみーだ あーみだったんーだ)

(起き上がって)おっと、こんな夜更けに何か聞こえて参りました。これは、念仏か？ この地で死んで行った者を弔う鎮魂の歌でございましょうか。

舞台は夜の寺に変わる。

大幣(おおぬさ)を持ったいととあやが現れ、歌いながら踊る。

M 墓おどり

(いと、あや、(美術)大幣で踊る。はな、遅刻して変な道具を持ってくる。例：釣竿・クワ)

いと 去年の春は 白無垢まといし山桜

今年ばかりは 墨染(すみぞめ)に咲く 墨染に咲く

いと 泡立つ磯の 草葉に集う螢火は

家路をさがし あこがれ感う あこがれ感う

(はな、登場)

あや しらかわあかく かがやきながるる もみじばを

さんずのかわのいさりびとみる いさりびとみる

女性・嘉

初雪を(初雪を) 寄る年波が(寄る年波が)さらえども(さらえども)

惚ぶ心(惚ぶ心)溶けることなし(溶けることなし) 溶けることなし(溶けることなし)

る *4番、○内を嘉兵衛がフェイク。ノリが良くなり、盛り上がる。ホカイが密かに踊っている

女子三人は、歌い終えて一礼。茂、嘉、ホカイ、拍手。

茂太郎 いやあ、立派だ。

いと 弔いに拍手はおかしいよ。

茂太郎和尚もあの世で涙を流してるべき。

いと 本物の踊り念仏のようにはいかねえけども、ねえ頭つかってな、作ってみた。

嘉兵衛 (つまみ食いしながら) いやいや、いけてた。いい感じ、いい感じ。

茂太郎 にしても、それ(大幣)はおかしいべな。

あや ん？

茂太郎 大幣は神様さ祈るときのものだ。念仏には使わねえ。

あや そうなのか？ おら、お祈りといえばこれだと思ってる。一周忌だから、気合い入れねばと

(大幣で茂太郎の頭をはたく)

はな この際、神も仏も関係ねえ。おらたちが手を合わせるのは、津波で死んだ人たちだ。

村さあるものは何でも使ってる弔うのがいいべ。

あや はなちゃんの言う通りだ。(漁師道具をふって)貧乏村だから、これが精いっぱいだけだな。

茂太郎 しかし、はな、日に日に網元に似てきたなあ。こお、口元なんか、そっ・・・

はな やだ、ちよっと、やめてえ。(茂太郎を叩く)乙女にむかって。

(嘉兵衛はその間、ひっきりなしに飲み食いしていた。)

はな あ、嘉兵衛！ あんだ、ひとりで食っちゃまう気？

嘉兵衛 いや、食ってない。(食べていた)

はな わずかな食糧を持ち寄ってんだ。今日まで生き延びたことに感謝しながら食べねば。

いと ほんとに、長くて短い一年だったなあ。

嘉兵衛 にしても今夜の飯は豪華だな。

はな 彦一がたくさん鹿を仕留めてくれたからな。(ブルースギター)

いと 彦一……。

嘉兵衛をのぞく全員が敏感にいとを見やる。

嘉兵衛 (気づかず) 相変わらず良い腕だ。あいつは来てないのか。……(返事がないので) どうした。何かあったのか。

はな いい加減、肉を掴むのをやめな。(嘉兵衛から鹿肉を奪い、いとに寄り添う)
あや 辛気臭いのはやめだよ！ 今夜は一周忌ってだけじゃない、いとの前出の祝いでもあるんだ。

(ウクレレをひきだす)

嘉兵衛 ん？なんだあ、いと、いいことでもあったのかあ？

茂太郎 それより嘉兵衛。網元には何て言われたんだ。

嘉兵衛 うーん。

嘉兵衛が拍子にあわせての謡。網元と女衞(伊達政宗もどき)が人形振り

嘉兵衛 網元が言うにはさ、仙台公の言いつけで、山をひらいて海を埋めて、田んぼを作り、稲を育てる。

秋になって稲穂が実り、米をさばいて藩が儲かり、みんな大助かり。(みんなで)おらたちみんな、大助かり！

茂太郎 (嘉兵衛をまねして、全員入る)おらたちみんな、大助かり、(演奏止めて)馬鹿が！

一同、一瞬もりあがるが、静まりかえる。

嘉兵衛 いや、説明が下手だった。

茂太郎 いらん。つくづくお気楽な網元だな。おめえもおめえだ。忘れたか。あの山を削るってのがどういうことか。

嘉兵衛 崇りのことか？ 忘れるもんか。おらの父ちゃんも、じいちゃんも、あの山をひらいて田畑を作ろうとしたんだ。そのたびに山から冷たいヤマセが降りた。作物は枯れて、じつつあたちは病気になる。

茂太郎 そうだ、仙台公の命令だとして死ねと言われて、はい、死にます、とは言えねえだろうよ。

嘉兵衛 でもなあ。あの殿様は独眼竜と呼ばれてるらしいぞ。

北上川に爪を立てて、この近くまで水を引くそうだ。

茂太郎 馬鹿！ だからおめえは夢見る夢太郎と呼ばれるんだ！

嘉兵衛 夢見る？ 初耳だぞ。

あや (茂太郎に) あんだ、もうよしてちょうだい。今日だけは。(ブルースギター)

俯くいとを、はなが労わるように肩を抱く。

はな (いとに) 明日は、朝から手伝いに行くがらね。心配することはねえ。

いとちゃんに綺麗なベベを着せられるなんて、こんな嬉しいことはねえ。

いと おおきに。

はな 仙台は賑やかなところだっていうがら、いとちゃんは性に合うかもな。

嘉兵衛 そういうことかい。いと、嫁さいぐのか！ 相手は。いいところの坊ちゃんかい？

はな (いとに) あんだめんこいから、日焼けて働くのはもったいねえって思ってたんだ。

旅籠屋で働くのは決して悪いことじゃねえ。

嘉兵衛 旅籠屋！ かーっ、玉の輿かいこれは。

はな (鋭く) だまらっしゃい。いとのお持ちがわかんねえのかい。

嘉兵衛 (わからなくて、天を仰ぐ)

いと (笑って) やめてくれ、おらが決めたことだ。嘉兵衛さん、おらは嫁さいくんじゃねえ、奉公さ出るんだ。

嘉兵衛 奉公……。

あやが突然泣き出す。はなも涙を誘われる。

嘉兵衛

(慌てて) おい、いいじゃねえか。時化でやきもきするよりずっと賢い。旅籠屋ならたらふく飯が食えそうだな。

いと

そうだ、おら、太っちまって、嫁に行けねくなるかしんねや。

はな

こんな日に彦一はなにしてんだあ!

いと

ちよっと、はなちゃん。

はな

おめえが彦一といひ仲だつてことはみんな知つてんだ。隠すでねえ。

いと

隠すもなにも、おらと彦一はなんも。

茂太郎

たわごとはよしな。

はな

(茂太郎に) おめえがそんなだから、いとは彦一と……

あや

もうやめてくれ! 今日は大切な日だ。ほら夢太郎、踊ってくれ。(楽器をつまびきながら)

嘉兵衛

この心をあの月よりも明るくしておくれ。おらがこの子の母親であるうちに。

あや

お、おう。(踊り出す)

いと

(バラード調で)おらは嬉しいんだ、この子のことを育てられた。

いと

おら悲しいんだ、この子が立派に育つたことが。おらは、嬉しいんだ。

いと

な、なあ。みんなで踊るべ。何もこれでお別れつてわけじゃねえし。年季が明けて帰る日まで、みんなの踊りを忘れないよ。(転調し全員で)らら、らら、らーららー……(観客に)みんな……

緒に

歌と踊りが劇のエンディングのように一気に盛り上がっていく。みな、感極まり涙を流す。

ミラーボールが回り、更に盛り上がるうとした時に、ひとりの男が姿を現し、

手に持った杖で地面を叩く。(歌演奏止まる)いとを買いにきた女衛(げげん)である。

◆女衛

女衛

おい!(曲止まる)あの、この劇、もう終わるんですか?勝手に盛り上がってもうエンディングで

嘉兵衛

すか?(アドリブ)。

女衛

(男を見て) おや、お客さんかい。

女衛

(正気に戻り)このあたりに、茂太郎という者はいるか。

茂太郎

おらだども……(男の正体に気づき、ハツとして)いらっしやるのは明日かと。

女衛

隣村で宿を借りようとしたが、人っ子ひとりいやしねえ。

茂太郎

隣村?あ、みんな餓死するか、家捨てたかで。さあ、家へお連れします。あや。いと。

女衛

これが娘か。(いとの全身を舐めるように見る)

茂太郎

今日は津波で死んだ者の一周忌です。小さな集まりを……(女衛の目に入る)

女衛

しかし、ほんとうに、きたねえむらだな。

コーラス

こんな辺鄙な場所からおさらばしたい ×2

女衛

(コーラス…はな、いと、嘉兵衛、仁さん、茂太郎等やスタッフ加わる)

女衛

一刻もはやくおさらばしたい/きたねえな、ほんとうに、ひでえむらだ。

俺は仙台の城下町からやってきた(自分の胸を叩く)貧乏くさいこの村に(自分の包みを叩く)はるばる

やってきたんだぜ、おめえらに施しをするためだ(包みから金を取り出しばらまく)施しをするためだあ

それ(はい)

それ(はい) それ(はい) それ(はい) それ(はい) それ(はい) それ(はい) それ(はい) それ(はい)

あやと茂太郎が驚いて金を拾う。

女衛

そいつはおまけだ、娘の分は、こっちの袋にたんとある。(包みを振ると金の音)お前は見た

か、仙台の町、(遠くの景色を仰ぎ見る)大町、肴町、南町、立町、柳町、荒町。人が賑わう譜代町。

伊達政宗がこの地に来てから、ほんの十年で大盛況(コーラス・大盛況) 商人たちがわんさか行き交い、数えきれない売り買いの機会、たった一刻出遅れりや、金儲けから置き去りだい。

コーラス こんな辺鄙な場所からおさらばしたい ×4

女衛 湿った茶色い砂浜、冷たい風が吹き抜ける／おうおうおうおう、そんなボロで大丈夫か／一刻も早くおさらばしたい、おさらばしたい／ふり、しばれるな、宿はねえのか、ほんと、ひでえ村だな。

女衛、村人をこけ脅すかのように杖を使って耳障りなリズムを奏でる。

みな うう・・・(歌、終わり)

茂太郎 へえ、、すまねえ、旦那。きたねえところですがうちで休んでください。

嘉兵衛 ちよつとちよつと、んなことねつすよ。この村にもいっぱいいいとこありますつて。特にこの村の祭りはすごいよ。歌も踊りも最高。まあいいがら、さわりだけでも聞いておくんないなせえ。

尺八) (嘉兵衛が気持ちよく歌い出す。他のものはため息をついてスローで各々女衛を気遣う。仁さん

嘉兵衛 寺々の香のけむりは細けれど 天にのぼりてむら雲となる、むら雲となる

死出の山 いかな亡者はふみそめて 行くと見たれど、二度とかえらぬ、二度とかえらぬ

茂太郎 (嘉兵衛の歌踊りを無視してマイムで。)「さあ、家へお連れします。いと、ご案内を」

女衛 (マイムで)「いとと申すのか?」いと顔の触り「茂とあやに今夜はゆくりしても構わんよ。」いとに「この村ともお別れだ。」

いと ……。

茂太郎 ……こちらへ。

茂太郎が女衛を案内して去る。あや、いとも続く。

網元 くそ、胸糞悪い。おらたちも帰るべ。明日はいとを見送ってやんねば。

めいめいに道具を持って去る。

嘉兵衛 恋しきは、恋しき人の墓標 見るより早く 濡るる袖かな 濡るる袖かな

(バラード風 墓踊りのギターが入る)

歌い終わった嘉兵衛の周りにはもう誰もいない。近くに腰掛ける。

石板をもてあそんでいると、いとが足早に戻ってきて「墓踊り」をウェイスパで歌う。

いと 去年の春は 白無垢まといし山桜 今年ばかりは 墨染(すみぞめ)に咲く 墨染に咲く

嘉兵衛 どうした。

いと (涙を拭きながら)おら……大幣(おおぬさ)、置き去りにしちゃまって。

いと、残されていた大幣を取る。

いと なあ、その石のそっくりさん、どこで見たのか思い出したよ。

嘉兵衛 なぬ。

いと 山の奥だ。彦一と見た。

短い間。

嘉兵衛 本当にいいのか？

いと 何がだ。

嘉兵衛 ……。

いと いいも悪いもねえ。決めたことだ。ただ……。 (懐から手ぬぐいを出し) 山で脚を擦りむいたとき、彦一にこの手ぬぐいを貸してもらって。嘉兵衛さん、会うことがあったら渡しておいてくろ。

嘉兵衛 (立ち上がり) 自分で渡せ。連れてきてやる。

いと 今から？

嘉兵衛 ああ、家で待ってる。

◆第三場く 森 (M シシの気配)

*嘉兵衛、太鼓と口唱歌(さんじきちきちきちこん)の練習を始めながら、歩き出す
が、笛の音が聞こえ、幾つものシシの目が森のなかから嘉兵衛を見つめているようだ。
[美術]ひかる目・動物の仮面にLED。嘉兵衛、しどろもどろ、こっけいな踊り。

嘉兵衛 なんだ。星たちが追いかけてくるようだ。木々の中できらきらと輝いているのは……命か？

「バキューン」彦一が鉄砲一発鳴らし、あらわれる。嘉兵衛、腰抜かす。

彦一 なにしてんだ。

嘉兵衛 彦一。助かったぞ、鹿に食い殺されるかと思った。

彦一 どんだけ腹すかしてもおめえなんか食わねえべ。

嘉兵衛 いやあ、さつき鹿どもをいただいたから。

彦一 仕返しなんて思いつくのは人間だけだ。

嘉兵衛 不思議な感じだ。こんな夜に山さ入るのは初めてでな。四方八方からあいつらの気配を感じて、最後には、なんだか、空の上に浮かんでいるようなあつたかい気分になったんだ。

彦一 あいつら放っておくと山も畑も食い散らかすぞ。

嘉兵衛 そうはいうが妙な気分だよ。いや、おめえが仕留めた肉は美味しくいただきました。

彦一 おめえのためにやったんじゃないやねえ。

嘉兵衛 本題はそれだ。いとのことだ。

彦一 ……。

嘉兵衛 いとは売られるぞ。

彦一 奉公だ。

嘉兵衛 奉公先は旅籠屋だ。どんな場所か知らねえのか。

彦一 ずっと前だが、おらの姉さんも旅籠屋さいったよ。おっちゃんじまったが。

嘉兵衛 そんなら……

彦一 そんなら、なんだ。いともそれぐらい知ってたんだ。それでも自分で決めたんだ。

親たちのため、奉公さ出るってな。

嘉兵衛 おめえたちは好きあってんだろ。だったら守ってやるのが筋じゃあねえんか。

彦一 奪えってか？ そしたらどうなる。茂太郎とあやが野たれ死ぬぞ。

嘉兵衛 いや、ちゃんと二人と話し合って、おめえの家とあつちの家で手を取り合って……

彦一　それができたら悩みはねえ！

間。

嘉兵衛　え、なんでできねえんだ？（クラシックのような曲調）

彦一　おめえ、忘れたんか。キャピュレット家とモンタギュー家はな、あ、間違えた。おらの家と、いとの家は昔から犬猿の仲だぞ。爺さん達は不漁の次の年、話し合い、手を取り合ってこの山を拓こうとしたが、耕しても耕してもんですすまねえ。で、じいさんたちは毎日けんかばかりだ。そうこうしてるうちに仇同士になってたんだな。んで、おらの一族は浜から追い出されて、こんなところで一人、山立ちをしてるんじゃないか。

嘉兵衛　あらまあ。

彦一　茂太郎はおらを毛嫌いしてる。冷害があったら山の祟り。時化があっても山の祟り。

おらが狩りをするせいで漁師に迷惑がかかるって思い込んでやがる。元はといえど、あいつの家がおらたちを追いやっつーのに！

間。

嘉兵衛　茂太郎がおめえを嫌ってんのか。それとおめえがあいつを憎んでんのか？

彦一　どっちもだ。

嘉兵衛　いとは好きか。

彦一　好きだ。

嘉兵衛　ならせめていま会いにいけ。いとは待ってるぞ。おめえはいとが好きだ。いとおめえを好きだ。

彦一　だがいとは茂太郎とあやも好きだ。でもな、茂太郎たちもいとが好きなんだ。

彦一　それがなんだ。

嘉兵衛　いや、こう順ぐりに丸くおさまればいいなあ、と。

彦一　（笑って）だからおめえは夢見る夢太郎なんて言われるんだ。

嘉兵衛　おい、それ誰が言い始めたんだ。今日だけで何度言われたことか。

彦一　（意外そうに）覚えてねえのか。（ブルースギター）

「寝るがうちに　見るをのみやは夢といはん、うつつあるものと思ひけるかな、思ひけるかな」

嘉兵衛　妙に懐かしい歌だ。

彦一　子供のおめえが馬鹿みてえにこの歌を好きだってんで、じいさんたちが呼び始めたんだ。

みんなで山を拓いてた頃にな。ああ夢太郎。会いにくくよ。どうせ後悔しかできない人生だ。

せめていとの顔を拝んでおきたい。そしてちよつとでも励ましてやれたら十分。じゃあな、バカ太郎。

彦一、歩き去る。

嘉兵衛　なるほど。おらを馬鹿にすることにかけてや、敵も味方もねえんだな。

風、そして葉擦れの音。

その向こうから、微かにホカイのディジュの音が聞こえてくる。

嘉兵衛　なんだ、この不思議な音色は。（音の方向を気にしつつ）いや、帰ろう。

これ以上山奥へ行つて、迷ったらまた笑いな。おらは夢太郎じゃねえ。目の前のものに、すぐに食いつく魚じゃねえ。

嘉兵衛、帰ろうとするが、音楽に引き寄せられるように山の奥へ。

◆第四場く ホカイビトの唄

山の奥には月明りが一筋差し込み、小さな**石碑(美術)**が照らされている。

そのそばで**ディジュをホカイが吹いている**。さらに**ブルースギター**。

嘉兵衛があらわれ、おそるおそる様子をうかがう。ディジュを吹きやめたホカイ。(ギター終わり)

ホカイ (嘉兵衛に気づき吹きやめ) ようやく来たか。(客席に) おお、皆さまも。お待たせしました。

そう、最初に「挨拶をいたしました、わたくしでございます。何を隠そう、このわたくし、名をホカイビトと申しまして、

嘉兵衛 おめえ、独りでブツブツとなに言ってるんだ……？

ホカイ (嘉兵衛に) まあ、待たれよ。(客席に) ホカイビトです。漢字で書くと「乞食者(こじきもの)」。となりますが、もちろん本当の名前ではございませんで、古い古い万葉の時代には、孤

独な旅の芸人を、このように呼び習わしたのでございます。

嘉兵衛 (ホカイビトの匂い嗅ぎ) くせえな。(触察) ぼろっちい物乞いか。

かわいそうに、おかしくなっちゃまったんだ。

ホカイ おまえ、それは失礼ではないかい？

嘉兵衛 悪いが恵んでやれるものはねえ。

ホカイ あのね、わたくしはシシオドリの起源をめぐる旅へと、(客席を示して)

あちらにおわす方々をご案内する役回りだね、

嘉兵衛 (客席の匂いを嗅ぐが理解できず) かわいそうに、おかしくなっちゃまったんだ。

ホカイ (違うんだけどなあ) まあ、よい。わたくしはおまえを待っていたのだよ、嘉兵衛。

おまえはここに何をしに来たのかな？

嘉兵衛 こんな夜更けに山奥で変な音が聞こえてきたら、気になっちゃまうだろう。

待て、おめえ、なんでおらの名前を？

ホカイ (不敵に笑って) わたくしはおまえがここに来ることを知って(いたのだ……)

嘉兵衛 待て、そこにあるのは！(ギター)

嘉兵衛、ホカイビトを押しつけて**石碑(美術)**に駆け寄る。

嘉兵衛 いとが言っていたのはこれか！ 本当だ、(触察) 同じような文字が彫ってある。

なんて書いてあるんだ？

ホカイ 文字ではない。絵だ。

嘉兵衛 絵？

ホカイ 絵

嘉兵衛 エ？(何度かこのやりとり)

ホカイ この石碑を残した者もまた、おまえと同じように文字を持たぬ者だった。彼らが描いたのは、
絵。

(客席に) それは、シシの絵だ。この地に眠るあまたの御霊(みたま)、それをわたくしどもはシシと呼びます。

嘉兵衛 シシだと？

ホカイ おまえは肉を食らうだろう。それがシシだ。おまえもいずれ土へと還り、

この地の肥やしとなるだろう。おまえもシシだ。

嘉兵衛 よくわからん。(取り合わず) 妙な形だ。のたうち回ったような……

ホカイ それは熊だ、これは雁(かも)。

嘉兵衛 鳥か、魚もいるな。

ホカイ 猪もいる、そしてこれは……、なんだ、欠けている。

嘉兵衛は石碑に見入っていたが、ふと手元の石板を思い出し

嘉兵衛 そうだ、この石……(美術・石碑の欠けた部分に合わせる) ぴったりだ。

あの津波はこんな山奥までやってきて、こいつを浚(さら) っちまったんだ。だども、おらが取り戻した。おらと一緒にこいつはここに帰ってきた。絵だって? なにが描いてある?

(触察のたうち回ったような……? こいつは、踊りか……?(音: デイジユ音+se)

ホカイ 欠けていた部分が埋まった。そこにあるのは……

嘉兵衛 鹿だ。鹿が、踊っているんだ!(能管入る)

二頭の鹿(美術)が現れる。月明りがひととき強まる。風の音。葉擦れの音。鹿が揺らぐ様に踊る。

ホカイ (客席に) ここでひとつご覧に入れましょう。万葉集巻の十六、乞食者の歌。(M)これこそがシシオドロの起源と目される芸能であり、いまわたくしがここに立っている理由でもあります。

ホカイビトが謡い踊り始める。鹿の身振りを伴った面白おかしい動き

M ホカイビトの唄

ホカイ

あしひきの この片山に 二つ立つ 櫟(いちひ)が本(もと)に

梓弓(あずさゆみ) 八つ手挟(たばさ)み ひめ鏑(かぶら) 八つ手挟(たばさ)み

獣(しし)待つと 吾が居る時に さ牡鹿の 来立ち嘆かく

たちまちに 吾は死ぬべし おほきみに 吾は仕(つか)へむ

吾が角は 御笠(みかさ)の栄(は)やし 吾が耳は 御墨(みすみ)の柑(つぼ)

目らは 真澄の鏡 爪は 御弓(みゆみ)の弓弭(ゆはず)

吾が毛らは 御筆(みふで)の栄(は)やし 吾が皮は 御箱(みはこ)の皮に

肉(しし)は 御膾(みなます)栄やし 肝も 御膾栄やし

(打楽器の殺陣 鹿と嘉兵衛のバトル)

吾が肉(しし)は 御膾(みなます)栄やし 吾が尿(くそ)は 御塩(みしお)の栄やし

老いはてぬ 我が身一つに 老いはてぬ 我が身一つに

(いと加わる) 「七重花咲く 八重花咲くと 申し賞(は)やさね 申し賞(は)やさね」 x 3 回

肉は 御膾栄やし 肉は 御膾栄やし たちまちに 吾は死ぬべし 吾は死ぬべし

おほきみに 吾は仕(つか)へむ

嘉兵衛が固唾をのんで見守っていると、幻だろるか、赤襦袢をまとったいとが、雌鹿に捕らえられて鹿に紅を塗られる(美術・死化粧)。いとが乞い願うような動きの先に、彦一が立っている。

(M展開)

現代訳 (美術・映像投影)

平群の片山の櫟(いちかひ)の木の下で、弓と矢を持って私はシシを待っていた。

そこへ雄鹿がやってきて嘆いて言うには、「私はおおきみに命を捧げます。」そして、続けた。

字幕に投影「私の肉体は、捨てる場所がありません。角はかざりに、耳は墨壺に、目はあなたの心を映す鏡。爪は弓に、毛は筆に、皮は宝石箱にお使いください。私の肉と心臓はあなたの養分になるでしょう

う。内臓は塩漬けにして保存食にしてください。老いた私ではありますが、この身は七重にも八重にも花を咲かせるでしょう。私のことをどうか褒めてください。私のことをどうか褒めてください。」

嘉兵衛 (眼をこすって) 彦一、な、なんだこれは。

ホカイ おかしみ、それはかなしみよ。鹿が大君にわが身を差し出し、肉は膾(なます)に、残った体は道具にしてほしいと頼む。それがこの歌の意味なのだよ。

嘉兵衛 なんのために。

ホカイ 犠牲になるのだから、せめて褒めてもらいたいのだろう。

嘉兵衛 馬鹿な話だ！ 褒めてもらってなんになる。死んじまったら終わりでねえか。

嘉兵衛はいとに向かって訴えかけているようだ。

彦一もまた悔しそうに震えている。

ホカイ だが―それこそが世の理(ことわり)ではないか。古くは朝廷、今は徳川。いつの時代も、

お上はわれわれから召し上げるばかり。あの仙台公も自分の国を豊かにするため、まさにいまおまえたちに無理難題を吹っかけているのではないか？

嘉兵衛 そりゃ、そうかもしれないねえが……

ホカイ (客席に) ご覧になった通りです。わたくしたちのこの悲嘆に満ちた魂を、鎮めるものこそが、そう、踊り。慰め、シシの御霊を、安らかに、次の世へと……。

嘉兵衛 鎮魂つてのは慰めなのかい？

ホカイ (客席に) そうなのです。シシオドリとは……

嘉兵衛 それは違え。違えぞ彦一！ なに突っ立ってんだ、いとは目の前だぞ？

このままどこかにやっちまうのか。おめえの気持ちはどこにあるんだ。

彦一、嘉兵衛の声に突き動かされて、いとの手を掴み鹿から奪おうとする。

いと彦一の気持を受け入れまいと首を横に振り、彦一から逃げようとする。

嘉兵衛 いと！ おめえの声はどこにいった？ おめえの口から聴こえてくるのは誰かの声だ。

他人の声で話すんじゃないかねえ、おめえ自身の声を聞かせろ！

いと ああっ！

いと悲鳴をあげて、走り出す。それはいと自身の声だった。

彦一はいとを追って駆け出す。

ホカイ おまえ、いったいなにを……

嘉兵衛が鹿の身振りを真似てホカイビトに突進する。

ホカイビトは怯む。芸能ダンスバトルの様相。

嘉兵衛 おらはさつき鹿どもと、戦いかと思ったが、奴らくるくと廻るばかりで……、

おめえの踊りをみて気づいたよ。あれは、踊りだ。そして遊びだ。あいつらはおらと遊んでいんだ。奴らはシシで、おらもシシ。確かにそうかもしれないねえ。だが、おらは褒めてもらうために生まれてきたわけねえ。遊ぶために生まれてきたのさ。踊りが御霊を鎮めるものなら、それは慰めのためではねえ。死んでも、遊びつづけるためだ。

嘉兵衛が鹿のようにホカイビトに迫り、ホカイビトが舞踊で抵抗する。

ホカイ そんなのはたわごとに過ぎない。だ。おまえこそ苦しみに悶える民ではないか。
嘉兵衛 苦しいからこそ遊びてえだろ。

ホカイ 現実はそのなかに甘くない。

嘉兵衛 そうだ、おらこそは夢見る夢太郎。とりわけ今日はへんてこな夢を見ているが、気にするな、
これがおらだわ。いろんなことがあったからさ、おらもおらを忘れちゃった。(ギター入る)

「寝るがうちに見るをのみやは夢とはいわむ 儂き世をもうつつとはみず、うつつとはみず」
……おらはこの歌が大好きだったのに、ついさっきまで忘れていたんだぜ？(ブルースギター)

ホカイ おまえ、その歌の意味がわかってるか？

嘉兵衛 寝てる時に見る夢だけが夢じゃねえ、この瞬間だつて夢みてえなもんだから、

でつげえ夢みて生きてこう。

ホカイ あ、ちがう、全然そういう意味じゃない……

嘉兵衛 (聞かず) 思い出したぜ。思い出せるんだ。自分が誰なのか。

ホカイ みんなのことが好きで、何を歌って、どう生きて、どう死ぬか。

嘉兵衛 みなすべてを忘れていく。
忘れりゃいい！ だからこそ思い出せる。砕けちゃったこの石碑でさえ、海を渡ってこの通り。

元のままではないかもしれんが、なんならその方が面白い。

ホカイ ……

嘉兵衛 じゃあ、おらは行く。ありがとな。

嘉兵衛が立ち去る。

ホカイビトはその姿を静かに見送るが、ふと我にかえる。
いつの間にか鹿も消えている。

ホカイ (客席に) 失礼。少し驚いてしまいました。シシオドリの起源といえば、このわたくし、ホカイ
ビ

トの踊りであるというのが有力でございます。だからこそ、この物語では、嘉兵衛がわたくし
に教えを乞うのが当然とと思っていましたが……。どうもそれでは済まないようです。起源と
は、踊りの形の謂い(いい)謂れ(いわれ)ではなく、この土地の精神を指すものなのかもしれ
ません。……そう、わたくしにも好きな歌があります。(鹿の様に踊りながら)

天竺の岩山崩れてかかるとも、こころ静かに遊べ我連れ

ホカイ ここから先の成り行きは、わたくしも、皆さまと一緒に固唾を飲んで見守ることといたしましたしよ
う。

月が雲に隠れ、ホカイビトの姿はまた風景に紛れる。

◆第五場く 雌鹿かくし

朝の太陽に照らされて、茂太郎の家の前。

戸惑った様子の茂太郎、あや。どーん、ドアが閉まるような大きな音。

茂太郎 (辺り一面に轟くように) いとおー！ どこだ、いと、どこに行っちゃったんだ。

その傍らに、イライラとした様子の女衛が立っている。
昨夜と同じ杖を下げ、小さな包みを持っている。

あや おかしいよ、こんなことは一度だってなかったよ。あの子が何も言わずに姿を消すなんて……。
茂太郎 (上手から下手まで) いとおー！
網元 夕べは気丈に振る舞ってたが、やつぱり怖くなったんだべ。
茂太郎 そんな軟弱な娘でねえ。女衛のイントロ。

女衛と嘉兵衛のしゃべくり(ラップ)バトル、
他は、歌に合わせて書き割りを持つ、または映像で表現。

女衛 だったら、娘はなぜここにいない。

嘉兵衛 やあやあ、みなさま揃って、陽気なこと。参り来て、これのお屋敷見申せば、南の面に建てた

お屋

敷、八棟造り(やつむねづくり)にこけらぶき、こけらを頼りに生(お)いた落葉松(からま
つ)

女衛 ひなびた門が、傾いている。客は通れぬ、見向きもせぬ(笑う)

嘉兵衛 白さは、門のカサギに巣をかけて、真の闇にも月と輝く。

女衛 薄汚い小さな橋に、蜘蛛の巣よりも大きな割れ目。明日には崩れちまうだろう(笑う)

嘉兵衛 これの御橋を見申せば、飛驒の匠のかけたそり橋、渡りそめるや鹿の八つ連れ。

女衛 それは倉か？ 中身は空か。貧乏神さえ寄り付くまい(笑う)

嘉兵衛 これの御倉を見申せば、七福神がお立ちやる。拝み申せや、いざやわが連れ。

女衛 (網元の前で)この村いちの屋敷でも、金目のなさは、一目瞭然。壁にも屋根にも隙間ができて、

寒風通るは至極当然(ゆっくり笑う)

網元 なんだおめえは、おらの家に向かって、失敬な。

気づけば女衛の周りを村人たちが取り囲んでいる。
皆、怒り心頭だが、さりとて詰め寄ることはできないようだ。

コーラス 金は天下の回りもの、辺鄙な村には回らんもの。x2

女衛 おお、いっちょまえに怒ってんのか？/だがお前が俺に勝てんのか？/俺は商人、お前は下人、

俺が金を恵んでやらねば、お前ら全員野垂れ死に。

網元 おらは下人じゃねえ、漁師だ！ 先祖代々、海に出てきたこの村の網元だ！(茂太郎が網元を抑
えようとするが、はねのける)

女衛 だが舟は津波で流された。いまでは元・網元だ。生きていくなら、娘を売るしか術はない。

俺が買おう、(茂太郎に)お前の娘。(あやに)お前も来るか、器量が良くても悪くても、俺
にかかれば金になる。

女衛が金をばらまき、村人たちは怯んで後ずさる。

網元 こんな侮辱は初めてだ。

茂太郎 だが他にすがるものはねえ。

網元 仙台公が救ってください。

女衛 公はお前らに見向きもせんよ、公が好むは価値あるもの。お前らどこにも見どころないもの
(笑う)

あや そんなことより、いとはどこだい。まさか、身投げしちやあいなないよねえ。
縁起でもないことを……あれ。

嘉兵衛の背後に獅子舞風の風呂敷の様な生地をかぶった者を連れている。
茂太郎 おめえ、うしろに連れてんのは、なんだそれ。その風呂敷は、いとのでねえか。
嘉兵衛 (茂太郎から連れを隠すように) やめてくたせえ、知らん知らん。
茂太郎 (嘉兵衛の連れに) おい、いとだろ。こつちさ来い！

茂太郎が嘉兵衛の連れに近づこうとするが、嘉兵衛がそれをさえぎるように動く。
そのうちに連れは村人たちの間に混ざってしまふ。茶番めいたやり取りには女衛も苛立つ。

茂太郎 (嘉兵衛に) おめえ、いとをどこに隠したあ！

嘉兵衛 隠れてんなら、誘い出すしかねえだろ。

茂太郎 どうやって。

嘉兵衛 踊るしかねえだろ。

女衛 なんだかわからんが、さつさと踊れえ！(M入る)

雌鹿かくし 嘉兵衛、あや、仁、網元、女衛 (アテルイの過ち) サイド(花道)には、他の出演者も出て盛り上げる

(イントロ全員) ドンドンドン ママママママママ

【サビ1 嘉兵衛】& 【ドンドンドン マママママママ】

アテルイの過ち 蝦夷の話×3 アテルイの過ち 男の過ち (間奏) ドンドンドン マママママママ×2

【A1:あや】

チカラのある男はいつも そう 多くの民から愛されていた *「そう」は、みんなでユニオン

気概のある男はいつも そう 不器用を武器に女を口説く(間奏全員) ドンドンドン マママママママ×2

【A2:網元】

古代の日本は、東と西で 違う文化が育まれてた
西は大陸の文明築き 東は縄文の知恵を守る (間奏全員) ドンドンドン マママママママ×2

【A3:あや・網元】

搾取される種族はいつも そう 大国主義に振り回されて
抗い続けても いつかは そう 深い絆も碎けてしまふ

【サビ2 あや&網元】& 【ドンドンドン マママママママ】

アテルイの過ち 蝦夷の話×3 アテルイの過ち 男の過ち(間奏全員) ドンドンドン マママママママ×2

【A4:女衛】

時代は流れ東と西で 日本という国、作り上げた
白河以北は一山百文 真紅の旗が白川の関越えた(白河の関越えた、みんなで喜ぼう)

(間奏全員) ドンドンドン マママママママ×2

【A5:茂太郎、彦一】

(茂太郎) 日高見伝説 我らは そう 自然と向き合い今も暮らす

(彦一) アテルイ・モレの伝説は そう ほんとはなくても、(茂・彦) チカラ になる

【サビ3 女衛&茂太郎&彦一】& 【ドンドンドン マママママママ】

アテルイの過ち 蝦夷の話×3 ヨアテルイの過ち 男の過ち

【A6:嘉兵衛】

陸奥黄金蝦夷攻められ 素朴な人たちが疲れ果てた
何十年もの戦いを止めて 阿弭流爲は京に向かってしまふ

【サビ4 嘉兵衛】& 【ドンドンドン マママママママ】

アテルイの伝説 蝦夷の神話×3 アテルイの伝説 蝦夷日高見

【全員】アテルイの伝説 蝦夷の神話×3 アテルイの伝説 蝦夷日高見

【全員】ドンドンドン マママママママ×4 (二間、風呂敷から彦一登場)

茂太郎 いとお！

自ら風呂敷をとったのは、彦一である。

茂太郎 彦一！

女衛 誰だ。

彦一 山立ちだ。

茂太郎 おめえ……え、いとは？

いとが現れる。

いと 父ちゃん！

茂太郎

いと！

あや よく無事で……

いと 父ちゃん。母ちゃん。心配かけてごめん。

女衛 ようやく娘のお出ましか。

彦一 そしておめえの出番はおしまいだ。

女衛 なんだと？

彦一 (女衛の前に立ちほだかり)町の商人がそんなに偉いか。この村は貧しいが、おめえのように

人を人とも思わねえ極悪人は一人もいねえ。

女衛 そうか？ 娘を売ったのはその親だぞ。

茂太郎とあやが身を固くする。

いと 違えよ、おらがおらを売ろうとしたんだ。生き延びるには自分を差し出すしかねえって、

おらが思っちゃったんだ。

女衛 正解。金はやる。さつさと来い。

彦一 (女衛を押し返す)

女衛 ちよっとお。

網元 茂太郎。どうするんだ。

茂太郎 いと。おめえの心は変わったんか。

間

いと (頷く)

茂太郎 (女衛に) 帰ってくれ。

女衛 金は？

あや いるかい、ぼけえ！

村人たちが、女衛のぼらまいた金や石を拾い集めて、女衛に投げつける。

女衛 痛い、危ない。ちよっとまで、ちよっとまで！

あや なんだ、まだ、懲りねえのか……

女衛 まあ聞けって。貧しくて取り柄のない村だが、おめえらと踊ったのはいがった。

なんだか、忘れてたもんが込み上げてきた。(金をあやにさつと渡す) んじやな。

女衛はカッコつけて歩き出す。なぜか、嘉兵衛が追いかけるので女衛、必死に走る。
残ったみんなは、あつげに取られ、見たこともない大金の袋を見つめ合う。

あや (震える手で)あんだ、これで、一冬、凌げるね。

茂太郎 (金から目を離し、土下座して)いと、すまなかった。網元も、他のみんなも。

おらが不甲斐ないばかりにひでえ思いをさせちゃった。この通りだ。

網元 おらもなんも言い返せなんだ。おらたちには力がねえ。んだがひとまず(あやの金に手を出す)

ぴしゃっと、あやに手を叩かれる網元。嘉兵衛が戻ってくる。

嘉兵衛 ああ、逃げられちゃった。

網元 なんて追いかけた。

嘉兵衛 あいつ、なかなかいい踊りしてたろう。次の祭りはおもえも踊りに来いって誘ったんだ。それに、このお村は踊りだけじゃねえ、他にもいっぱいいいところあるって教えてやりたくて。

網元 まったくおもえは。この村にほめられるとこなんかねえんだよ。

嘉兵衛 おめえ、この村の網元だろ。だれかに褒められるのが望みか？ そんなん退屈でねえか。でも褒めるのは気持ちがいい。いいもん見つけたって、楽しくならあ。

間。 (やちたびのメーローなインスタ)

茂太郎 いと、心変わりの理由を教えろ。

いと 彦一と添い遂げたい。

茂太郎 許さん。

あや あんだ！

茂太郎 (いとに) おめえが奉公さ行かないのはわかった。もはや、おらに道はねえ。一冬持ったとしても、おらは死ぬだろう。あやも死ぬ。そしておめえも死ぬんだ。

あや あんた、頭を冷やしておくれ。いとが奉公さ出ると決まったときから、

おらは自分に言い聞かせてきた。奉公なんざ半端な覚悟じゃできねえ。そんな娘をもったおらは幸せな母親だつて……。いや、母親失格だ。娘にそんな思いをさせた、おらは人間失格だ……。

いと 母ちゃん……。

あや でも、いとの心は変わった。それはおらやおめえを人間のままでいさせてくれるつてことだ。

茂太郎 そうかもしれないねえ、だがこいつ(彦一)の一族がおらたちに、いや、この村さ何をしたか。

娘をこいつにやるなんて、ご先祖様に顔向けができん。忘れたとは言わせねえ。

嘉兵衛 おら、忘れちゃったんだよなあ。何があったんだ？

茂太郎 いいか、よく聞け、

嘉兵衛 いや、興味ないからいいや。忘れちまえ。

茂太郎 おい。…………。

彦一 茂太郎。

彦一 (間)おらは忘れたぞ。

茂太郎 なんだと。

彦一 おめえの一族がおらの一族を山へ追い払った。もめ事はあったが、片方ばかりが悪かったわけじ

やねえ。だからおらは、ずっとおめえを憎んできた。だが、もう忘れた。

茂太郎 どういうことだ。

彦一 おらはさつき、おめえと踊った。それでようやく思い出した。おらは、いとが好きだ。ついで

に、

ちよつとはおもえも好きだ。そして、この村が好きだ。

おらは、好きなもののために生きてえ。

おもえは違うんか？

(答えない)

茂太郎

嘉兵衛 (風呂敷を茂太郎の頭にかぶせる) おめえも風呂敷かぶって踊りなおせば素直になれねえかな。

茂太郎 ふざけるな！(と言つて風呂敷を握りしめるが、外さない)

彦一 いとを、おらにくだせえ。もうおらは一人では生きねえ。いとはおらが守る。村もおめえたちのことも、おらが守つてみせるぜ。

茂太郎、答えないが、風呂敷の下で顔隠したようにも見えない。泣いているのかもしれないが、それは誰にもわからない。あやが、茂太郎に寄り添う。

嘉兵衛 彦一、かつけえ。(音アウト)やあ、めでてえな、さ、もういっちよ踊るべか。

村人たちが二人を祝福し、あやと仁さん(海のとなかの)リズムを刻み始めようとするが。

網元 踊ってばかりいられるかい。仙台公は助けてくれねえらしいぞ。

嘉兵衛 なに、助けられてちや芸がねえ。殿様を助けるつもりでやってみようや。

網元 なにを？

嘉兵衛 漁も、狩りも、稲作も。思いつくことは何でもしよう。

網元 そんなに上手くいけば苦労はねえ。

あや 何言ってるんだ。田んぼを作れって言ったのはおめえでえか。

いと おら、苦労だって楽しむよ。みんなとここで生きるって決めたんだ。

あや この村で米が作れりゃあ、海の機嫌ひとつで飢えることもなくなんだな。

茂太郎 だども、祟りはどうする。

あや 山の神様が怒るなら、大幣振ってお祈りするべ。

網元 いつ終わるとも知れねえ事業だ。

嘉兵衛 今生に限らず気ままにやろうや。いずれすべてを忘れるだろうが、そのうち何かを思い出す。

寄せては返す波のように(イヨ)、海を渡る風のように(イヨ)、この地を巡る、それは力だ。

網元 それが踊りか。

嘉兵衛 そうさ、遊びさ。シシの御霊の遊び場さ。(ホイヤ) (Mギター入る)

◆結 第六場く 心静かにあそべ我連れ

ホカイビトが現れ、客席に語る。

ホカイ 生まれ、そして死ぬ。人は、どこから来てどこへ去るのだろう。こんなにも儂い人生を、誰のために悩み、何のために飾り立てるのだろう。わたくしが、いま皆さまと一緒に思い出したシシオドリの起源こそ、この問いに対する答えなのかもしれません。皆さまもご存じでしょう、この土地は数多の災難に見舞われます。冷害、疫病、飢饉……そして津波。それなのに、なぜ今日までこんなにも力強く命がつながってきたのか。一説によれば、彼らの子孫は仙台藩主の前で舞いを披露し、伊達の家紋の一つをつけることを許された、とか。いいえ、彼らの強さは人に褒められる個性にあるのではございません。自ら世界を褒める力、浮世を遊ぶたましいにこそあるのです。ほらご覧ください、この者たちの遊びが、もしかしたらいまにも残るシシオドリの起源なのかもしれません。

ホカイビトの背後、シシオドリの装束を装着しながら嘉兵衛たちがあらわれる。

ホカイ おまえ、いまなら見えるかい。あちらにおわす方々が。

嘉兵衛 おう！

(ギター終わり)嘉兵衛たちは客席に応えるように太鼓の調べをきりりと締める。

ホカイ この土地は今や日本有数の米どころでございます。日々の営みを寿いで、

このわたくしの役目を終えることといたしましたしょう。

ホカイビト、去る。

M やちたび (シシオドリのテーマ)

(舞手・嘉、茂、彦、仁、あや、いと、網、女衛)

八千度の 浜よる波 より増して
かえすがえすは 太鼓のしらべ
天霧(ぎ)らし 降る白雪 染まる野辺
晴れ舞台とぞ シシの道行き
人は寝(い)を 寝みし知らぬ夜(よ) 明くるまで
八千度 花の散るらむ さや咲かむ 永遠におどろう
遊べ我連れ こころ静かに

(間奏・早くなり) 口唱歌 ザツチコザンザンザツチコツカ

月よ風ぎ つれなき木ごと 悉(ことごと)く
いずれは揺らむ 春風ぞ吹く
玉の緒の 行方も知らず わかれても
八千度 花の散るらむ さや咲かむ 永遠におどろう 遊べ我連れ こころ静かに
八千度 花の散るらむ(数え切れないほど) さや咲かむ 永遠にある(こう)寄せてきた波、
遊べ我連れ こころ静かに(それより多く、海へ返された太鼓の調べ)
八千度 花の散るらむ(数え切れないほど)、 さや咲かむ 永遠にある(こう)花は散る
(だが、また咲く)、遊べ我連れ こころ静かに(心静かに遊べ我が連れ)
守るべき起源を知り神秘の音を奏でよ

【読み仮名】

嘉 やちたびの はまよるなみ よりまして
かえすがえすは たいこのしらべ
茂・あ あまぎらし ふるしらゆき そまるのべ
はれぶたいとぞ ししのみちゆき
三人 ひとはいを ねみししらぬよ あくるまで
全員 やちたび はなのちるらん さやさかん とわにある(こう)
あそべわがつれ こころしずかに

彦・い つきよなき つれなき(ことごと)く
いずれはゆらん はるかぜぞふく
たまのおの ゆくえもしらず わかれても

全員 やちたび はなのちるらん さやさかん とわにおどろう
あそべわがつれ こころしずかに
やちたび はなのちるらん さやさかん とわにある(こう)
あそべわがつれ こころしずかに
んー、まもるべききげんをしり、しんぴのおとをかなでよ
嘉 (ひはてりすべてのみこみ かこをはいにかえていく
すべてはわれらのてのなかにある)

【現代語訳・英語訳】

数え切れないほど繰り返しの浜辺に寄せてきた波、それよりなお多く、この浜から海へと返されたのは太鼓の調べである。「太鼓のしらべ（緒）を繰り返し締め、太鼓のしらべ（律）を繰り返し」空一面を曇らせて降る雪に、野原が白く染まっている。これこそが我らの晴れ舞台だと、シシが道行く。人が苦勞して眠りに落ちたその夜、人の知れないその夜が明けるまで、遊びあかすのだ、さあ、我が連れ。「遊ぶことで寝苦しい夜を明かしてやれ、シシたち」「いつしか雪も止み」風もなく静かな月夜、樹々は冷たい様子で佇んでいるが、いずれは春風が吹きその悉くが揺れ騒ぐだろう。「月よ、お前はつれない様子で小言を述べるかのようにだが、春になればお前も（春の朧月のように）その身を揺らして見せることだろう」

その命が何処からきて何処へ行くのか知るものはなく、そのまま別れてしまおうとしても、こころ静かに遊べ我連れ。数え切れないほど繰り返してきたように、花は散っているだろう、だがまた鮮やかに咲くだろうから。こころ静かに遊べ我連れ。

カーテンコール曲（挨拶後速やかに、あるいは、挿入歌）

『サバイバルの唄』歌詞

ミミズなめくじフナムシけむし x4

人類が百億人に到達したら
我らは何を 食べるのだろうか

氷河期がきても我らはいまのままくらせるのだろうか？

縄文の人は 争ったのだろうか？

文明を 築いたことが間違いか？？

こんなにちっぽけな我らは はたして 生き残れるのだろうか？

我らは森に帰ろう

尾根を伝って山に登ろう

我らは海に帰ろう

川を下って約束の場所へ

ミミズなめくじフナムシけむし x2

人類は他の動物とは違うんだ どこが違う？人は踊り奏でる
どんなに飢えて苦しくとも 人は祭りを開く

我らは森に帰ろう

尾根を伝って山に登ろう

我らは海に帰ろう

川を下って約束の場所へ x2

ミミズなめくじフナムシけむし x4

幕